

公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

研修報告書 (2021年度 助成者)

作成日 2021年 8月 25日

氏名 (フリガナ)	河野 ちひろ (カワノ チヒロ)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2021年8月17日 (火) ~ 8月21日 (土) オンライン (Zoom)
大学名	東北大学
学年	5年

今回の研修では、主に2つの大きなテーマについて、アウトプットも仕方を実践を通して学ぶことができました。1つは、PBL (Problem Based Learning)方式で、アメリカの Medical School の学生たちがどのような形で症例検討を行い、議論を進めているのか、2つ目はアメリカの病院において Resident が上級医に対するケースプレゼンテーションをどのような形式で行っているかということです。

1つ目について、今まで私の大学では4年生の時にチュートリアルという形で小グループで症例を検討する授業があり、何回かこのような症例ベースでの必要な情報のピックアップ、他にどんなことが知りたいか、検査としてどんなことをすべきか、鑑別疾患としてどんなものが挙げられるか、といったことをグループ内で意見交換する機会がありました。その授業はハワイ大学のもを参考に行われていたのですが、みんな意見を言いにくいのか、なかなか議論が活発になることはありませんでした。今回、実際に現地の医学生にグループに入ってもらったことで、普段どんな雰囲気でも PBL が行われているのかということを感じることができました。特にいいと思ったのは、グループの中のメンバーがどんな発言をしたとしても、その発言のいいところを拾って評価する姿勢が身につけているところでした。医師になってからはなかなかそういうわけにはいかないのかも知れませんが、相手の意見をきちんと受け入れていいところを評価する姿勢は議論を活発にする上でも重要だと感じたので、今後議論の進め役になる機会があったらそのような声かけや姿勢を取り入れていきたいと感じました。

2つ目にあげたCase Presentationの練習は、はじめに定型のフォーマットを示していただき、それに沿った形で練習を繰り返す形式でした。自分で患者さん役の人からhistory-takingを行い、その上でその内容を先生にcase presentationを行うのですが、行うごとに先生からフィードバックをいただく機会があり、疾患を考える上で重要な情報(例えばCOVID肺炎が疑われる場合にはワクチンの接種の有無、COPD増悪が疑われる場合には喫煙歴など)をプレゼンテーションの最初に持つてくるということを特に気をつけるようにご指摘いただきました。また、まとめるときに発症形式 (acute, subacuteなど) や神経支配領域 (innervation) などについて手短かにまとめる言い方についてもご指導いただきました。今までの英語力では、何とか状況を説明できたとしても、アメリカの病院内で実際に使われているような表現は全くと言っていいほど知らなかったもので、このワークショップを通して実際の現場で用いられている形式や方法を学ぶことができたのが一番の収穫でした。そして、ただその知識をインプットされるのではなく、説明の講義は15分くらいで終了してそのあとはすぐに練習と実践の時間に入るという形式だったので、ただ理解するだけではなくアウトプット的能力が身についたと感じています。また、普段なかなか話す機会のない実際にアメリカで仕事をされている先生に質問をしたり、フィードバックをいただけたりするという点でもとても有意義でした。

同じようにアメリカ臨床留学を目指している5,6年生の仲間と会うことができたのがとてもよかったです。それぞれ別々の大学や地域出身で、なかなか直接会って一緒に勉強できる機会はありませんが、今後も情報共有をしたり勉強の進捗を交換しあったりして切磋琢磨していきたいと考えております。そしてPGY5までに渡米できるように今後も精進したいと思います。最後に、このような研修に助成金をいただいて参加する機会を与えていただきまして本当にありがとうございました。